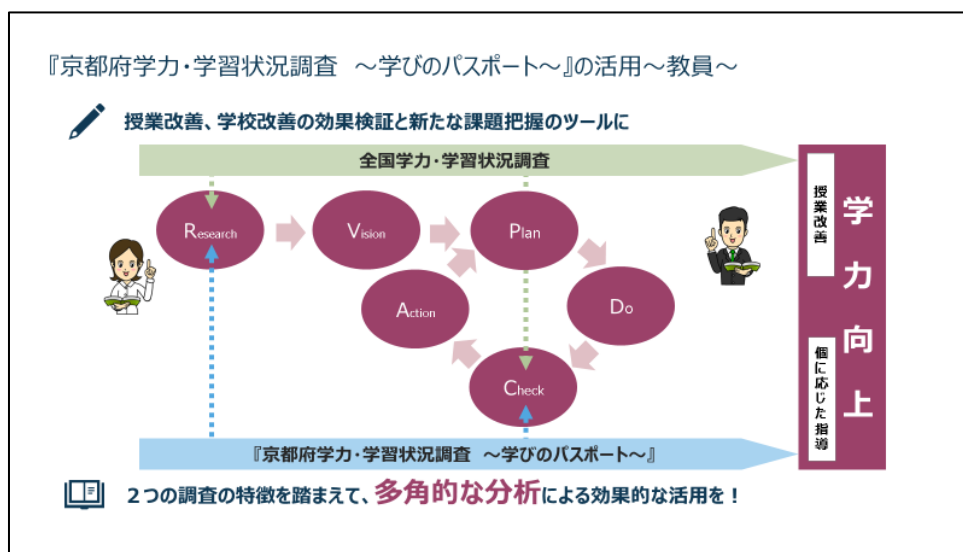


IV 調査結果の活用

～調査結果を活用した学校のRV-PDCAサイクルの確立～

本調査は、各学校で分析を行い、授業改善や個に応じた指導等に活用することが重要です。ここでは、各学校における分析・活用の手順例をお示しします。



1 児童生徒の状況を多角的に「Research」し、

「Vision」を共有し、「Plan」を立案

(1) 「学校改善プラン」等を作成する。

①学校教育目標・児童生徒の現状及び昨年度のまとめを踏まえ、目指す子どもの姿を具体化・焦点化

【1 学校名等】※1～3は、結果返却されるまでに記載する。

学校名								校長名	
学 年	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特別支援	児童生徒数	名
学級数									
担当教員名									

※可能であれば中学校区で共通した「目指す子ども像」も記入してください。

① 目指す子ども像

② 目指す子ども像に対する現状と課題

③ 目指す子ども像に達するための仮説

②目指す子どもの姿に達するための仮説を構築

【2 具体的な取組内容】

※仮説を踏まえて、学校として、いつ、何に取り組むのかを記載してください。
 ※本資料作成のために新たに取組を増やしていただく必要はありません。これまで行ってきた取組を、本調査の目的の視点から再度捉え直していただくことを大切にしてください。

③仮説を踏まえた具体的な取組の明確化

【3 仮説及び成果を検証するための質問項目】※3は、すべての枠を埋める必要はありません。

学年	質問番号	質問項目	概念	備考

④仮説及び成果を検証する質問項目の焦点化

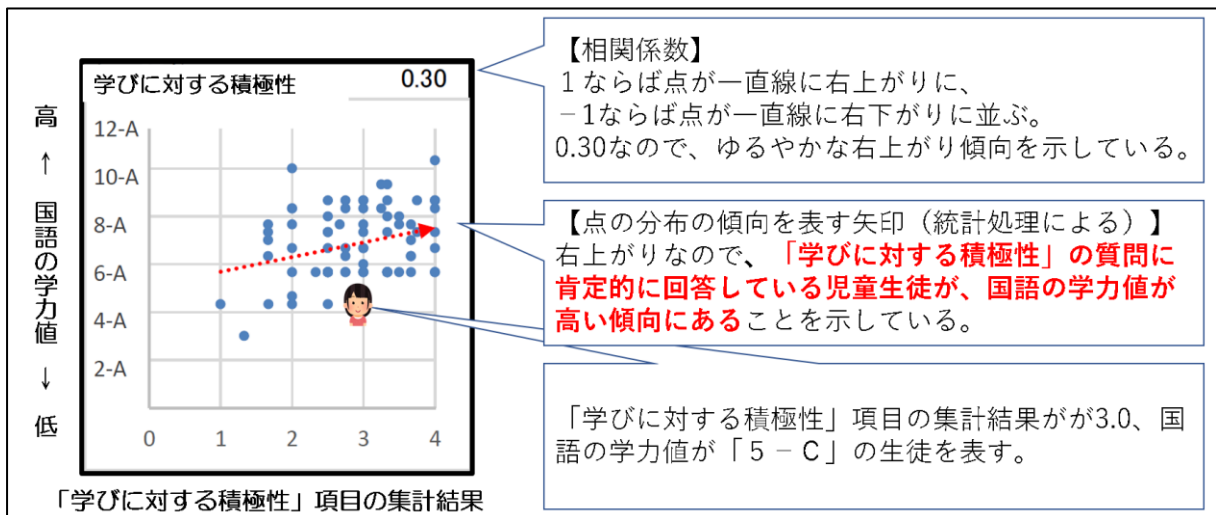
2 結果データを分析 (Check) し、

具体的な手立て (Action) を計画し実施

- (1) 結果データが返却されたら目指す子どもの姿をもとに分析したいデータを焦点化する。
- (2) 散布図等を活用し、一人一人及び集団の状況分析をする。

留意点

- ①非認知能力のすべてを映し出すものではないということ
- ②結果データのみで判断せず、観察との両面から判断すること
- ③あくまで相関関係を示すものであり、因果関係を示すものではないということ



【6 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法

②個に応じた指導・支援及び集団としての指導・支援のどちらも記述

集団としての指導・支援方法

【7 仮説の修正】

※分析結果を踏まえ、仮説の修正が必要であればここに記載してください。

③分析結果を踏まえた仮説の修正

【8 具体的な取組内容の修正】

※【7 仮説の修正】を踏まえ、具体的な取組内容の修正が必要であればここに記載してください。

④学校の具体的な取組内容を修正

(4) 児童生徒の振り返りを実施する。

①「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～振り返り用紙」の様式等を活用

②自身の学びの様子や成長等、調査結果を振り返る場面を設定

③児童生徒自身が強みと課題を知り、自身の状況を把握し、次への展望を持ち、学び続ける力をはぐくむことができるよう、指導・支援

『京都府学力・学習状況調査 ～学びのパスポート～』の結果分析～児童生徒～

児童生徒に、結果を振り返る場面の設定を

表面

表面

結果を振り返り、自己を理解し自ら学び続けられるように

これまでの自分の振り返り

認知能力の伸びに着目して…

	小学校			中学校		
	第1学年	第2学年	第3学年	第1学年	第2学年	第3学年
高	スタ213					
イ	スタ210					10-A
エ	スタ209					
オ	スタ208					
カ	スタ207					
キ	スタ206					
ク	スタ205					
ケ	スタ204					
コ	スタ203					
サ	スタ202					
シ	スタ201					

京都府版はぐくみたい力の姿に着目して…

これからの自分の見通し

3 年度末に、今年度の学びの変容を再度「Research」し、
次年度の「Vision」を共有し、「Plan」を立案

【9 児童生徒の変容（普段の様子から）】

※【6 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】で計画した指導・支援を行った結果、児童にどのような変容が見られたかを記載してください。

①指導によって、児童生徒がどのように変容したのかを記述

【10 来年度の構想】

②来年度の構想を記述したのかを記述



次年度当初に②で立てた構想に基づき、
「学校改善プラン」等を作成

4 各研修会の内容

～令和5年度第1回「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る分析・活用研修会～

対象：各学校教務主任及び研究主任等（複数名での視聴を推奨）



結果データの見方・捉え方や 分析及び仮説の構築の方法を理解し、学校改善プランの作成について見通しを持つことができる。

散布図の見方を理解し、データと見取りの両輪で具体的な手立てを考える。

3 分析 (1) 結果データの見方

【散布図（2つの項目の相関関係を視覚化）による分析】
質問調査の回答結果と教科の学力の結果から傾向把握が可能に

この生徒に注目してみましょう。
データからは、どんなことがわかりますか。

- 数学の学力値は低い
- 計画性の質問項目には肯定的に回答

「計画性」の項目を確認し、どんな生徒が想像してみてください。

- 計画的に学習しているが、計画の立て方に問題があり、学力に結び付いていないのではないか？
- 計画的に学習していると本人は思っているが、実際には計画的に学習できていないのではないか。

3 分析 (1) 結果データの見方

【散布図（2つの項目の相関関係を視覚化）による分析】
普段の様子や、個人カルテと組み合わせるとより詳細に分析し、手立てに生かす。

この生徒に注目してみましょう。
データからは、どんなことがわかりますか。

- 数学の学力値は低い
- 計画性の質問項目には肯定的に回答

「計画性」の項目を確認し、どんな生徒が想像してみてください。

- 計画的に学習しているが、計画の立て方に問題があり、学力に結び付いていないのではないか？
- 計画的に学習していると本人は思っているが、実際には計画的に学習できていないのではないか。

Aさんですね、最近頑張っても結果がでないと悩んでいます。個人カルテで他の結果を確認すると、「学びに対する積極性」が低いですね。確かに、普段の様子を見ると、計画的を立てて頑張っていますが、分からないことがあると、どうしていいか分からず止まってしまう場面がみられます。「分からないときにどうしたらいいか」を話し合ってみようと思います。

最後は必ず、児童生徒の普段の様子と照らし合わせて手立てを考えることが重要

分析・活用の留意事項

研修資料より

非認知能力の全てを測ろうとしているのではなく、第2期京都府教育振興プランに基づき、府のはぐくみたい力を踏まえて構成

京都府版はぐくみたい力に関する調査（非認知能力に関する調査）

項目ごとに、

- よく当てはまる 4
- どちらかといえば当てはまる 3
- どちらかといえば当てはまらない 2
- 当てはまらない 1

とし、概念ごとに集計

「高いから良い」「低いから悪い」ではありません。

研修資料より

2 調査結果の活用 (3) 調査のまよひ

数値やグラフを基に、仮説を立てながら指導の改善に生かす。

〇気になる児童生徒は？
〇学校としての強みは？逆に課題と捉えるところは？

- 継続的において、否定的な結果を出している児童生徒へのアセスメント
- 学習の仕方や非認知能力が良かった児童生徒に対する個別の手立て
- 教科の調査において、下位10%に入っている児童生徒の質問調査の回答や、学力の力、非認知能力の傾向の分析
- 効果的だと考えられる指導・支援の共有
- 次年度に期待する指導の方向性を検討

どのような指導・支援をしたら、さらに向上するだろうか。

成果を次年度の調査結果で検証し、さらなる改善に生かす。

(3) 留意事項について

- 代表者や担当者だけで分析しない。
- データを様々な視点で読み取る。
- 参加する教員のそれぞれの視点から、子どもの様子を見取り、情報を共有する。
- 教職員全員で指導・支援の方法を検討し、共有する。

協議の中で
分析と指導・支援の方法を検討・共有

数値やグラフを基に、仮説を立てながら指導の改善に生かす。

- 気になる児童生徒は？
- 学校としての強みは？逆に課題と捉えるところは？
- どのような指導・支援をしたら、さらに向上するだろうか？
- 指導の成果を次年度の調査結果で検証し、さらなる改善に生かしていく。

教育データ・サイエンティスト（以下、教育DS）について

教育DSとは、データを活用し、授業や学校を変革させる人材のこと。

教育DSは、各市町（組合）教育委員会から推薦を受け、京都府教育委員会から承認された教員を対象に年間3回の研修会を実施した。研修の目的は、京都府学力・学習状況調査の結果分析及び活用について、先んじて学び、各地域の研修等で分析・活用のアドバイスができるようになることとしている。

～令和5年度第2回「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る分析・活用研修会～

対象：各学校の国語、算数・数学、英語のいずれかを担当する教員

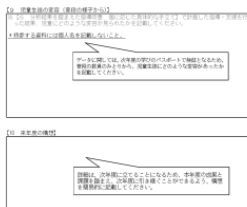


「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」に係る結果データに基づき、自校の授業改善案を作成し、実践に活かす。

全国学力・学習状況調査と学びのパスポートの役割について

	全国学力・学習状況調査	学びのパスポート
問題	<p>新しい学習指導要領が求める育成を目指す資質・能力を踏まえ、それを教育委員会や学校に対して、具体的なメッセージとして示すものとなるよう検討を進める。</p> <p>「全国的な学力調査の今後の改善方策について(まとめ)」(平成29年3月)</p>	<p>児童生徒一人一人の学力の伸びを測定するため、IRT分析を行うことから、様々な難易度の問題を出題する。また、問題を非公開にする必要がある。</p>
活用方法	<p>学力調査の問題、解答類型及び授業アイデア例を活用して、授業改善を行う。</p>	<p>学力と学習方法の傾向、認知能力と非認知能力の一体的な育成、等を読み取り、1人1人への具体的な指導・支援に生かす。</p> <p>また、2年目以降は、学力の伸びと非認知能力等の変容の傾向から、指導・支援の成果検証を行い、指導改善を行う。</p>

研修資料より



学びのパスポートの結果を授業に生かすために



【データを分析】し、【データを活用】したら、児童生徒の変容を把握し、指導・支援を修正する。

- ・「具体的な手立て」に対して、児童生徒がどのように変容したのか。
- ・児童生徒の変容にあわせて手立てを修正する必要があるのか、続けるのか。
- ・成果の見られた手立てを、学校教育の他の場面でも活用できないか。

「手立て」が具体的であるからこそ、「手立て」に対する振り返りが可能になる。

学校改善プランを更新し続けることで、効果的な指導・支援を学校全体のものとする。

調査の目的や特徴を理解し、適切に活用することが求められる。

【参加者の感想より（趣旨説明）】

- ・学校改善プランについて、自校でも分析を行いまとめてきたが、説明されていた「誰が、いつ、何をするか」という視点がぬけていた。そこを考えないと具体的な改善とはならないので、自校に持ち帰り、考え直したいと思う。今後も、加筆・修正をくり返していきたい。
- ・「学びのパスポート」の説明は一度聞いていたが、今日改めて学力調査の意義、学びのパスポートの役割を再確認することができた。「課題は自分たちで解決するもの」という言葉は非常に共感できる。認知能力と非認知能力も一体的に育む授業となるよう、授業をアップデートしていく必要があると感じた。

5 実践事例

(1) 児童生徒の状況を多角的に「Research」し、「Vision」を共有し、「Plan」を立てる。

【綾部市立綾部中学校ブロック（中学校）】：生徒の学力を向上させていくために



教員の経験（観察）と結果データとの両輪で結果の背景も含めて分析し、全教職員で仮説を具体化し手立てを検討する。

学校教育目標の具体化



本研究における綾部中学校で目指す子ども像：
夢の実現に向けて、努力できる生徒

「夢＝特定の職業」というわけではない。
今の時点での「夢」
こんな風に生きていきたい。
こんな大人になりたい。

努力できるって？
⇒「自己調整」できる生徒

のびしろしかない
綾中生をどう
伸ばしていくか？

(30)	自分の考えた道すしをほかの人の視点からも考えて、見つめ直すほうだ。
(31)	わからない問題にであつたとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。
(32)	課題が終わったら、自分が学んだことを簡単にまとめている。
(33)	目標を達成するためのよりよい方法をいつも考え、取り組み方を変えていっている。

(仮説)
・具体的な将来の展望や、目指す目標を自己決定すれば、その先に向かって自己調整しながら、学びを自分ごととして捉えるのではないか。【生徒】
・授業が楽しい、学びが自分ごとになれば、家庭学習を自ら取り組むようになり、学習時間が伸びるのではないか。【生徒】
・教師の授業力が上がれば、生徒の学びが自分ごとになるのではないか。【教師】

学校教育目標を質問調査の言葉を手掛かりに、
目指す子どもの姿の焦点化と仮説の言語化

結果分析



方針共有



仮説の具体



複数名で対話をしながらデータ分析



自己調整と関連する項目とも関連付けて方針を共有



学年で取組と授業者の具体的な手立てを検討

学校教育目標及び校長の方針を基に、教職員の経験や観察とデータの両輪で分析や協議等を行うことにより、方針の背景の理解につながり、教職員の気持ちを揃えることができる。また、教職員の積極性を引き出し、同じ想いで子どもたちの手立てを考えることができる。

【栗田学院(宮津市立栗田小・中学校)】：幼小中合同の栗田学院全体研修会の実施



教育目標、目指す子ども像の達成に向け、学院全教職員で結果分析を行い、授業改善、個別支援のあり方を検討し、実践に生かす。

趣旨の共有

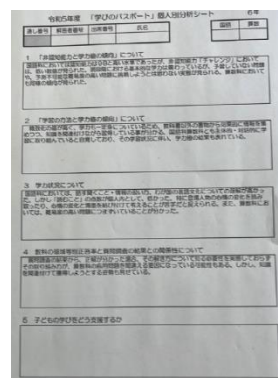
- ・ 幼小中10年間を見通した教育の重要性
- ・ 教育DSによる京都府学力・学習状況調査の趣旨説明

分析

- ・ 研究主任が「自己調整」、「チャレンジ精神」、「自分らしさの発揮」、「主体的・対話的で深い学び」の散布図に出席番号を記入した用紙を準備し、配付
- ・ グループに分かれ、各グループで教育DSや研究主任が1人を例に挙げ、具体的に分析することで、全教員が分析の方法を確認
- ・ 散布図の分布状況と普段の子どもの様子から詳細に分析したいと考える子どもを確認後、1人の教員が1人の子どもについて分析。分析結果を端末に用意されたシートに記入することで全員で共有

分析結果の活用

- ・ 共有した分析結果を基に、KJ法で具体的手立てを検討
- ・ 個人分析シートを作成し、子どもとの面談、指導の実践に活用



研究主任、教育DSからの趣旨説明、その後のグループでの具体的な分析方法の確認により、学院の全教職員が、「何をしたらよいのか」を理解することができた。そのことにより、「まずはやってみよう。」という雰囲気を生み出し、主体的な分析、具体的手立ての検討へと繋がった。

また、学年、校種を超えて分析を行い、手立てを考えることで、学院全体として一貫した指導・支援を行うことが可能になる。

(2) 結果データを分析 (Check) し、具体的な手立て (Action) を計画し実施する。

【栗田学院(宮津市立栗田小・中学校)】:研修成果の子どもへのフィードバック

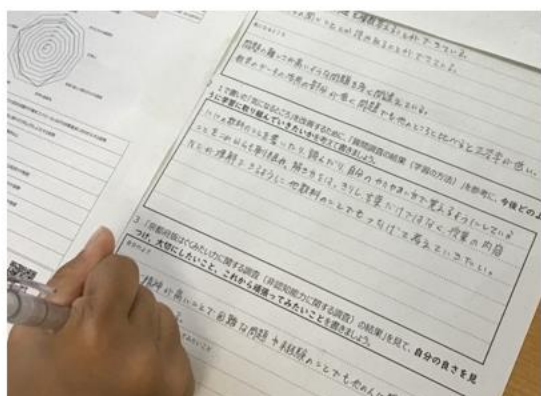


児童生徒が自らの学びを調整しながら、次の目標を設定できるような振り返りができる場を設定する。

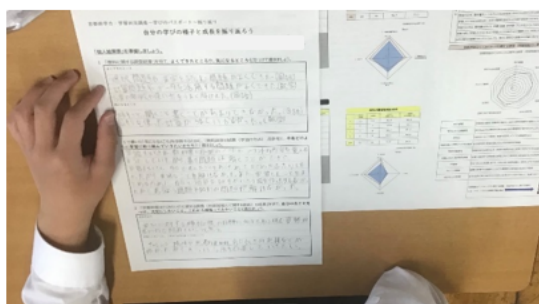
研修を踏まえた「学活での振り返り」

- 分析を踏まえた指導の方向性をもったうえで、学活での「振り返り」の時間の設定
- 「非認知能力の結果は高ければよい、低ければ悪いではなく、自分を理解するため」について教職員の共通理解

(中学生の振り返りより)



1つ1つの教科のことを書いたり、読んだり、自分のやりやすい方法で覚えるようにしていることをこれからも取り組み、解き方をはっきりし、言葉だけではなく、授業の内容などが理解できるように他教科のことでもつなげて考えていきたい。



学習するときは、教科書や授業のノートやプリントの内容を覚えるようにしていたから、基礎問題は解くことができた。学習するときに、自分で考えたことを改めてまとめなおしたりしなかったから、重要なことを解けなかった。また、学習したことをまとめるために、自分で簡単な絵をかいたり図を作ったりしなかった。

子どもが自己を客観的に見る機会とするためにも振り返りは重要である。調査結果の数値の高低に一喜一憂するのではなく、子ども1人1人が自己の特徴を知り、自ら「こうなりたい」と目標をもつことができるよう指導することが大切であり、そのためには、指導にあたる全教職員の調査結果の活用に関する共通理解が重要である。

